機鋒

TOUGEN NEWS

６月１日（日曜日）

発行所　桃源院
発行責任　桃源院　広報部
〒191-0065 日野市旭が丘1-10-4
編集　桑原賢龍　田中高文
桃源院アドレス
http://www.momo.or.jp/

桃源院「機鋒」編集委員から

何日も何日も、しとしとと雨の降る『梅雨入り』『入梅』の季節で、せっかく五月という月が温かさを切り開いてくれたのに、しばし降り続く『梅雨寒』によって遮られますね。

しかし庭には『紫陽花』（あじさい）が咲き乱れる情緒は、このしとしとと降り続く雨があっての日本的情緒でもありますね、また雨は人の心を慰める妙薬ともされており、日本においては、この雨の風情も風流です。

この梅雨時期もそう長く続くものでもありませんん、もう六月二十二日ともなれば二十四期の『夏至』を迎えることになり別名を『短夜』（みじかよ）となり、いよいよ『向暑』、本格的な夏の暑さを感じる陽差しが雲の切れ間から、そして幾つかの水たまりに反射する季節の到来です。

夏の食中毒対策

気温が高くなると心配になるのが食中毒
体力のない子どもや年配の方がかかると大変なことに

毎年8月は厚生労働省によって「食品衛生月間」に定められているように、夏場（6月～9月）は、細菌が原因となる食中毒が多く発生しています。

なぜ夏場に食中毒が増えるのかというと、その理由の一つが「高温多湿な環境」食中毒を引き起こす細菌の多くは、室温（約２０度）で活発に増殖し始め、人間の体温ぐらいの温度で増殖のスピードが最も速くなります。

また細菌の多くはジメっとした湿気を好むため、湿度も高くなる梅雨頃から食中毒が増え始めます。そしてもう一つの理由は夏バテなどによる私達の体の「抵抗力の低下」です。また細菌が少量であれば、食べても胃液により殺菌され、食中毒は発病しません。

しかし、暑さで大量摂取した飲料で胃酸が薄まっていたり、胃腸薬によって胃酸の分泌が抑えられていると、十分に殺菌されず、食中毒になりやすくなることもあります。

食中毒を予防するには共通のポイントがあります。それを確実に実践して、食中毒から身を守りましょう。

買い物

とくに生鮮食品などは、商品の回転率のいい店で購入する。

買い物の順番として、生鮮食品は最後に購入する。

買ったものは長時間持ち歩かず、２時間を超える場合は保冷材を入れる。

保存

ビンや缶などの容器は、ふいてから冷蔵庫に入れる。

冷蔵庫は詰め過ぎず、扉の開閉を少なくして庫内の温度を上げない。

肉や魚介類の汁は、他の食品につかないようにする。

肉、魚などは調理の直前まで冷蔵庫に入れておく。

低温でも増殖する菌がいるので、食品の長期保存は避ける。

調理

調理前はもちろん、調理中、生鮮食品を触ったら、よく手を洗う。

包丁やまな板は、先に生野菜などの加熱しないものに使い、その後に肉や魚介類に使う。

調理器具は、食材が変わるたびに洗う。熱湯をかけると消毒効果がある。

食品の中心部まで、75℃で1分以上加熱すると、ほとんどの菌は死滅する。

食事

常に、温かくして食べる料理は温かく（65℃以上）、冷やして食べる料理は冷やして（10℃以下）おく。

食品は、調理前であっても料理後であっても、室温に長時間放置しない。

食中毒菌O157の場合、室温で15～20分置いておくだけで、菌の量が2倍に増えます。

残った食品

早く冷えるように、浅い容器に小分けして保存する。

１００均で手に入る容器

食べるときは、十分に加熱してから食べる。

調理後、時間が経ち過ぎているものは、思いきって捨てましょう。

体の抵抗力が弱い子どもや高齢者だけではなく、誰にでも起こりうる食中毒。

健康な成人でも風邪やストレスなどで、抵抗力は簡単に弱くなってしまいます。

食中毒の予防と同時に、もしかかっても重症化しないよう、抵抗力をつけておくことも大切なポイントです。

一年で最も食中毒の多いこの時期、バランスのよい食事と適度な運動・休養で菌に負けない体づくりも行ってくださいね！

☆でも基本はやっぱり手洗い！

桃源院本堂復興再建委員会

平成23年3月11日の「東日本大震災」で、宮城県大崎市の桃源院本院は甚大な被害を受けました。250年の歴史の本堂は、江戸から明治の廃藩置県、日清・日露戦争、太平洋戦争を経てきてます。また、昭和37年、平成8年、平成15年と大きな宮城北部での地震で受けた損害の補修を続けてきました。しかし今回の大地震の被害は甚大で補修も間に合いません。250年の歴史に終止符を打つことになりました。

４月８日本院役員３０余名が参加して解体に当たり「報恩感謝供養会」を行い、２１日より解体作業が始まりました。遺跡調査を経て地鎮祭と進んでまいります。

解体前

解体作業

心頭滅却すれば火も亦涼し

――快川紹喜――

山門上にて火炎に包まれ

快川紹喜（かいせんじょうき）【？～一五八三】

臨済宗。快川は字。俗称土岐源氏。美濃（岐阜県）生まれ、仁岫宗寿の法を嗣ぎ、妙心寺に出世、美濃崇福寺に住した。後に甲斐（山梨県）慧林寺に住持し、武田晴信の厚遇を受けた。織田信長による武田家滅亡の時、寄寓していた佐々木義弼を北国に逃したため、信長に火を放たれ示寂。正親町天皇より大通智勝禅師の号を賜った。

甲斐の武田信玄は、天正元年（一五七三年）、五十三歳で病没した。つづいて、信玄の宿敵であった越後の上杉謙信も、天正六年、四十九歳で病没した。

この戦国の両雄が川中島をはさんで対戦し、互いに精魂を傾けて、さまざまな戦法を展開しつつ、ついに勝敗を決せずして両雄相次いで病没した歴史は万人知るところである。

彼らはただの戦国の強豪というにはとどまらなかった。彼らの残した詩文の類は、彼らの教養の高さを如実に示している。それどころか、信玄も謙信ともに禅を学び、いずれも出家していたことはさらに一層興味深い。

上杉謙信は、曹洞宗の禅匠、天室光育と益翁宗謙に参じた。天室も益翁も林泉寺の住職であり、謙信という法名は師の「益翁宗謙」の「謙」の字を貰ったものである。謙信が家臣を誡めた言葉に、次のような禅味豊かなものがある。

「生を必する者は死し、死を必する者は生く。要はただ心志の如何に在り。よく此の心を得て守持すること堅ければ、火に入りて焼けず、水に陥りて溺れず、何ぞ生死に関せむ。予、常に此の理を明かして三昧に入れり。生を惜み死を厭ふは、未だ武士の心胆にあらず」

ところで、一方、武田信玄の師は希菴玄密及び快川紹喜の二人、すなわち臨済門の禅匠であった。

信玄は臨済、謙信は曹洞、そして二人の勝負がつかなかったのだから面白い。

信玄が武将に示した家法の一条には、

「参禅を嗜むべき事、語りて曰く、参禅別に秘訣なし、唯生死の切なるを思うのみ」

とあり、これまた生死のまっただ中の間一髪を参究していたことがわかる。希菴も快川も恵林寺の住持であった。

ここで、快川紹喜の壮烈な入寂の様子を披露したいが、その前に少々この戦国時代の史実に触れる必要があろう。

織田信長と徳川家康の同盟軍が最も恐れていたのは、信玄と謙信であった。この両雄が健在でいるかぎり、彼らは京都に上って天下を取ることは絶対にできないし、もし取ったとしても安心して天下人を気取ることもできないであろう。

ところが期せずして、この最も恐ろしい人物が二人とも相次いで死んだので、信長はまず武田氏を攻めるべく、虎視耽耽としてその機の熟するのを待った。

信長の探知したところによれば、信玄の後を襲名した勝頼は歴戦の勇将であり、かつ剛毅な人物である。しかし、人格が狭量で諸将の進言を容れず、逆に好臣の甘い言葉に乗り、このために多くの民心を失っていた。

そこで、天正十年二月、いよいよ進撃を決意し、まず息子の織田信忠を先発せしめ、ついで信長自から軍勢を従えて、勝頼攻略の途にのぼった。

織田氏の大軍が嵐のように甲斐に侵入するや、武田氏の有力な一門は勝頼を見捨てて、あるいは敵に内通して、いざという最後には多くの武将が寝がえった。

かくして勝頼は孤立無援となった。天目山の悲劇がそれで、三月十一日、勝頼は三十七歳、夫人北条氏は十九歳、息子の信勝は十六歳、おのおの最後の奮戦の後、辞世の和歌を残して自害した。

『信長公記』は、次のような仏教的な論評をくだしている。

「信虎より信玄、信玄より勝頼まで三代、人を殺すこと、数千人という数を知らず。世間の盛衰、時節の転変、捍ぐべきに非づ、間髪を容れず、因果歴然、此の節なり。天を恨まず、人を咎めず、闇より闇道に迷い、苦より苦海に沈む、噫、哀れなる勝頼哉」

かくて新羅三郎義光より連綿として二十六代つづいた甲斐源氏の武田氏は、わずかに一ヶ月にして滅亡した。信長は三月十四日、勝頼父子の首を検分し、十五日これを飯田でさらし首にした。かくて、織田信長と、その子信忠は、余勢を駆って

武田の残党の一掃に取りかかった。このときの出来事が恵林寺炎上の悲劇である。

恵林寺は塩山市にあり、夢窓国師の開山による名刹である。永禄七年、武田信玄は寺領三百貫文を寄付し、快川和尚を招請して住職とした。当時、恵林寺には常に二百余の雲水がいて、大いに禅風を挙揚した。

快川紹喜すなわち大通智勝国師は、もと美濃の人、俗姓は土岐源氏、京都の妙心寺の仁岫宗寿に参じ、修行の後、故郷美濃の崇福寺に住職となった。しかし、美濃の大守、斎藤義竜の態度が無礼であったので、飄然として故国を去った。

武田信玄はこれを聞いて、礼を厚くして快川を恵林寺に迎えたのである。そこで快川は、希菴禅師の後をついで恵林寺の住職となり、学風を仰いで遠近から参学する者二千に及んだという。

正親町天皇は快川に、天正九年、特に勅をもって国師の称号を賜わった。

快川は、信玄と深く意気投合するところがあった。ふたりとも男児の中の男児であり。好漢、好漢を知るといわれるように師弟の意気が投合した。信玄の七周忌のとき、快川は信玄を讃えて「人中の竜象、天上の麒麟」とまで言ったのである。

しかし、武田氏は天正十年三月十一日を以て滅亡し去った。世俗の人情に立ち入らない筈の禅者快川の胸中やどのようなものだったろう。そのせんさくは暫く置く。

恵林寺には、武田の残党の敗軍の武将が大勢かくまわれた。その中には足利義昭の手先となって武田氏と通じ、織田氏をてこずらせた者どももいた。

「窮鳥ふところに入るときは猟夫もこれを殺さず」

という。ましてや、慈悲心を以て平等に対すべき仏家においては当然である。快川はもちろん当然のこととして、これらの敗走者を寺内にかくまったのである。

織田信忠は恵林寺に使者を出し、足利義昭の残党たる六角承頼（佐々木次郎）、義昭の使者たる上福院、大和淡路守の三人をただちに引き渡されよと申し入れた。快川は断乎として拒否した。三度、使者を出したが、快川は三度とも拒否した。

信忠は、ついに恵林寺の焼打ちを決意し、兵を以て恵林寺を包囲した。ときに天正十年四月三日。比叡山、高野山、本願寺を焼き、僧侶たちを殺戮した織田のことである。信忠が三度も使者を出して折衝したのは、むしろ異例に属する。彼は、このたびの武田征伐においても、すでに三月三日、上諏訪神社を焼き払っていた。

織田の戦略は、火を以て象徴される。一切の行動は烈火の如くに激しく、行くさきざきで放火したのも、その戦法の一つであった。

ちなみに、豊臣秀吉の戦略は水を以て象徴される。障害に出逢えば大きくうねって曲折しつつ、それを乗り越えた。彼の得意とする戦法は水攻めであった。

織田の堪忍袋は、快川三度目の拒否に出会ってついにその緒は切れたのである。織田が三度も使者を出したのは、前年に朝廷より国師号を賜った高徳の禅師に対して、最大の礼を尽くしたものであった。いくら戦国の荒武者たちといえども、真の出家僧侶に対していきなり焼き討ちというわけにはいかなかったのである。

快川は近隣の寺の禅僧を恵林寺に集めて、議決を以て返答し、断乎として織田の申し入れを断った。たとえ一寺滅亡するとも決して三人を差し出すわけにはいかないと、ひそかに逃亡させてしまった。

旭日昇天の勢いに乗じた織田父子の堪忍袋の緒が切れたのも当然だったのかも知れない。

しかし、織田父子の相手は、身に寸鉄をも帯びない非武装の僧侶ながら、多年心胆を鍛える修行した不屈の禅者である。たとえ百万の大軍を以て攻めるも、その意思を曲げることはできない。

とうとう、戦慄すべき光景が現出した。恵林寺に押し寄せた軍勢のために、一山の大衆百余人は一人残らず山門楼上に追い上げられた。これを軍勢が取り巻いて秋のすすきのように槍の垣根を作った。山門の下には薪が山と積まれた。四方から火の手があがり、黒煙がもうもうと立ち上り、すぐさま黒煙から真っ赤な火炎が渦をなして燃え上がった。この世のものとも思われぬ焦熱地獄に、阿鼻叫喚、踊り上がり、飛び上がり、互いに抱き合ったまま焼け死ぬ者、楼上から飛び降りて下で待ちかまえていた武士に首をはねられる者、目も当てられぬ惨状を呈した。

おりしも楼上には、快川が正面の正位に坐し、各寺の長老が次位に坐し、つづいて随徒が位によって坐した。

快川、口を開いて垂語していわく、

「諸人、即今、火焔裏に向って如何が大法輪を転じ去らむ。各々一転語を著けて、末後の句とせよ」

この意味は、「諸君、まさに、この一大事の瞬間、火焔のまっただなかにおいて、平素の力量を発揮したまえ。すなわち、仏々祖々の大法輪を、いま如何にして転ぜんとするか。各自思うところを吐露して、以て最後の一句たらしめよ」

ここにおいて、各長老は思い思いに所見を吐露した。それが終る頃には、火勢いよいよ強く、法衣に燃えうつって、もはやこれまでと思われた。しかも、一同は威儀を正して、山のごとくに動かなかった。

このとき、快川の高く唱える声が、火焔のなかから響きわたった。

「安禅は必ずしも山水を用いず。心頭を滅却すれば火おのずから涼し」

この快川の末後の一句は、後世永く伝えられ、日本民族の血肉の中に完全に染みこんだ。

人生のなかで、さまざまの困難や危機に逢うと、日本人はあたかも呪文を唱えるように「心頭を滅却すれば火おのずから涼し」と言った。すると、妙に勇気が湧きあがってくる。

快川は日本民族の誇りである。いかなる権力や暴力に対しても、一歩も退かない男児のなかの真男児である。

坐禅とは安楽の法門だ。安楽でない坐禅というものは存在しない。火焔裏にあっても、なお安楽である。そうすると、坐禅は常に必ずしも山水の静寂を選んで行うとは限らない。たまたま火焔裏に坐禅を行ずることになった。ここに、わが真骨頂を吐露して、宇宙の大真理を説かん。いわく、心頭を滅却すれば火おのずから涼し。

これは、決して作り話ではない。敵方の記録『信長公記』でも、快川和尚以下の従容たる入寂のさまを記し伝えて、次のように述べている。

「恵林寺僧衆御成敗の御奉行人、織田九郎次郎、長谷川与次、関十郎右衛門、赤座七郎右衛門、以上、右奉行衆罷り越し、寺中残らず、老若山門へ呼び上せ、廊門より山門へ、籠草をつませ、火を付けられ候。初めは黒煙立ちて見えわかず、次第次第に煙をさまり、焼けあがり、人の形見ゆる処に、快川長老は、ちともさわがず、座に直りたまるまま動かず。

その外の老若稚児、若衆、踊りあがり、飛びあがり、互ひに抱き付き、悶え焦れ、焦熱大焦熱の焔に咽び火血刀の苦しみを悲しむ有様、目も当られず。

長老分十一人、果てられ候。その中存知の分、宝泉寺の雪岑長老、東光寺の藍田長老、高山の長禅寺長老、大覚和尚長老、長円寺長老、快川長老。中にも快川長老、是は隠れなき覚えの僧なり」

敵方の記録に目を通しても、快川がいかに泰然として、四大五蘊の一切皆空を立証したかは明明白白である。

ちなみに、人はよく「心頭を滅却すれば火も亦涼し」というが、これは間違いである。「火も亦涼し」というのは火でも涼しいの意味で、力んだ言い方である。快川

にも生きて働いた。

しかし時代が下り足利時代以後、禅にも文弱の風が流入して、ここに文字禅や風流禅となり、さらに卑俗に堕ちては権門にこびへつらうだけの幇間禅になりさがっていった。

このときに、快川紹喜が現われて、日本男児の真骨頂を示したのである。禅の長養する反骨の精神の何たるやを、大衆の眼前に示したのである。

いたずらに謎のごとき問答を繰り返すのが禅ではない。いたずらに坐して無為に生涯を空費するのが禅ではない。酒脱と風流とを事として飄々乎として去来し、以て人生を茶化するのも禅ではない。

深遠な哲理や思想を並べ立てて学者ぶるのが禅ではない。時勢に媚びて、時の時流のままに流されるのが禅ではない。

文化主義は禅の精神に反する。事大思想は禅の精神に反する。便乗主義も禅の精神に反する。

このような主義や思想の影にかくれ、生命の本質を失ったとき、快川紹喜和尚が現われて、禅の真実の面目を示したのである。

そして、『信長公記』の著者は、勝頼の死を論評して

「間髪を容れず、因果歴然」

と述べたが、これは、そっくり織田氏父子にこそ当てはまった。恵林寺炎上の悲劇の後、わずか二ヵ月にして 信長は天正十年六月二日、本能寺に自殺し、信忠は同じくこの日、二条城に自殺した。まことに「間髪を容れず、因果歴然」だ。

ひとり快川大和尚のみ、この因果歴然の理を超越して、火焔裏の涼風に向って永遠の勝利と自在を示したのである。

は、そういう意味で頑張ったのではない。ここは、どうしても「火・おのずから涼し」でなくてはならない。

禅は鎌倉時代においてその真実の面目を大いに発揮した。蒙古の大軍を一挙に退ける大力量の英傑、北条時宗の内面

永平寺の胡麻豆腐をつくってみよう！

＊材料（６人分）

ゴマペースト（瓶、缶）	100g
酒	100cc
みりん	50cc
水	500cc
吉野葛	62g
＊敷味噌	
赤味噌	100g
白味噌	20g
砂糖	40～60g
酒、みりん	大さじ各1

＊敷味噌の材料を小鍋に入れ弱火にかけ２～３分かき混ぜ敷味噌完成！

お好みでゆずを数滴絞り入れても良い。

作り方

１、材料を鍋に入れてよく混ぜる（出来れば裏ごしを２度ほどする）

２、強火にかけて木べらでゆっくりかき混ぜる。

３、固まり始めたら中火にし手早く混ぜる（必ず液体がポコポコいう強さの火で）

４、２０分かき混ぜ続けるのだが焦げ付きそうになったら少量づつ水を加える

木べらですくって２秒程して落ちてくる固さになったら

「流し缶」約１０cm×１５cmに流し、これを氷水の入ったボウルに入れラップをして３０分ほど冷やす。

５、少し水を入れたバット缶の上に６当分に切込みを入れた「流し缶」を裏返しにあける

皿に敷味噌しいて胡麻豆腐を盛り付け完成！

～ひとこと～

２０分かき混ぜるのは大変ですが、愛情がしっかり入る分おいしくできます！

ハワイの日系移民は、1868年６月19日横浜駐在領事Van Lead の斡旋東京横浜周辺の日本人労働者と、その家族150名が集団移民として、サイオト号（Cy Otto）で渡航したのが最初である。彼らは、１ヶ月（26日働き）で月給４ドルの３年契約の移民であった。

しかし、諸事情によりその後18年間日本人の移民は日本政府により禁止された。

1885年日布両政府間の交渉により、労働移民約定書が調印され、

官約移民の時代が始まる。同年２月８日山口県出身者を主体とした第１回移民船 The City of Tokyo で946名が到着した。６月17日には広島県出身者を中心にした第２回移民船で988名が移住し、本格的移住が始まることとなった。

以後、1894年までに官約移民29032名が月給15ドルの契約で移住した。その後は民間会社の斡旋による、私契約移民の時代に入り、1900年までに私契約移民40208名が移住した。ハワイが米領となり、契約移民法が廃止された後も移住は続き、1908年に日本政府が渡航禁止とするまでに自由移民68326名が移住した。

しかし、当初の移住者の砂糖耕地での生活は厳しく、郷愁と期待はずれに、自暴自棄的な生活に追いやられるものも少なくなかったといわれる。このような日本人を鎮撫し救うものとして、移民を送り出した日本側、受け入れたハワイ側、日系移民の一部のものが、宗教に着目することとなった。そして、当初の宗教家は慰問師という名称で登場してくる。

曹洞宗の20世紀初頭のハワイ布教を振り返ると、砂糖耕地などの契約農民を布教対象とする時期である。当時、移民労働者の鎮撫政策の一つとして、耕地内に寺院建立のためなら、２～４エーカーの土地を１年間１ドルで借用できることが認められていたため、経済的に余裕のない日本人移住者にとっても、日本風の寺院を建立することは可能であった。したがって、都市よりも耕地に寺院が建立された。例えばエバビーチのサトウキビプランテーションの中にあった「曹洞寺」は後述のワイパフ布教所のまた出張布教所になっていた。

布教活動そのものでは、川原仙英が始まりとされる。また、観音講、裁縫学校、婦人会、日本人学校、青年会などを組織し、現在のハワイ寺院の行っている布教教化の原型を作ったのは岡田大豊であると考えることが出来る。

また、磯部峰仙は町の寺の時期のはじまりの開教師である。磯部は次々と駐在開教師を招き、各地に布教所を増設し、後に米本土に渡った。日本曹洞宗にとって磯部は米本土開教の先覚者であるとされる。

また、終身に渡ってハワイ開教に携わり、多くの功績を残した駒形善教も磯部の招きに応じたひとりである。

岡田大豊は夫婦でハワイに渡った（1908年12月）。以後短期間に、観音講の組織（1909年10月）日曜学校開設（1910年）仏教青年会（YBA＝Young Buddhist Association）を組織（1910年）岡田夫人を主任とする裁縫学校の開設（1910年10月）婦人会を組織（1910年12月）日本人学校の開校（1912年６月）と、次々に教会組織を発展させた。

1911年10月、日本より布哇宗教視察員として派遣された忽滑谷快天は、岡田が主任を務める当時のワイパフ布教所の様子を以下のように報告している。

「信徒数563名（出張法話所信徒215名を含む）で、毎週土曜日に法話会が開かれ、年分行事は所定のごとく行われていた。付属の教化事業としては、まず裁縫教習学校が新設されて、裁縫の他、料理、礼式等を教授し、女性としての教養を身につけさせ、加えて威儀即仏法の宗旨にのっとった精神修養訓話がなされており、約40名が受講していた。

また「曹洞宗心友会（仏教青年会）」を結成し、仏教教理の解説および実践要綱を教授し「戊申詔書」の趣意を実行する目的をもって、夜学部、演説部、普通部の３部に分かれて組織されていた。

この会は、主として青年を対象としたもので、夜学部は小学校卒業程度のものに対して必要な教養、知識を教授し、演説部は布教師とともに街頭に立って従事したといわれる。

普通部は前両部を補佐するものであった。会員は180名くらいで、基本金80ドルが積み立ててあった。ワイパフ布教所の要であったこの会は、

中堅幹部の養成の役割をもっていた。

この他に、毎月28日には吉祥講が開設され、約50名の会員は『修証義』を読誦し、その趣旨の解説法話が行われていた。観音講も主として婦人たちによって、40名ほどが参加しており、基本金39ドルを積み立てていた。

婦人会は135名で組織され、主として日本人同胞の罹災病患の人々に対し、義損金を募り、これを助けるなど、その功績は甚だ大であった。」

また布教師は居留者の出産・死亡届や、願書の代書をして、信徒間に信頼と利益を与えていたことも、見逃すことのできない間接的布教であった。

砂糖耕地などで厳しい労働が課せられていたハワイ日系移民にとって、坐禅や道元の説く難解な宗教哲学より現世利益や救い、教育の方が重要であったはずである。したがって布教スタイルの違いが、日本とは社会事情が異なるハワイ日系一世社会で起きた可能性は高い。

都市から離れたプランテーションで刻苦の労働に従事する1世にとって、子供の教育が大問題であった。特に日本人は教育には昔から熱心であった。そこで彼らは1ヶ月に4日しかない休日を利用して、開教師らと力を合わせて自前の布教所を作り、そこに子供たちの教育を託したのであった。

その訳あって、2世（いまゆうに八十歳を超えている）の老人と話すと、子供の頃に布教所で開教師から教わったことを懐かしく話してくれる。

壁に掛けてある、勉強を習った開教師の写真を見上げて先生と呼び掛ける。その2世の教養の高さは驚くものがある、当時の日本の基本的な教育がそのまま遥かなハワイの地で行われていた。

現在でも、ハワイ在住の僧侶を日系人たちは先生と呼んでいるのである。

ワヒアワ
竜仙寺

ワイパフ　大陽寺

アイエア
太平寺

平成２５年度　護持会決算報告

	適用	収入	支出	
平成25年度	**護持会費**	4,610,000		
	修繕費 **維持管理費**			
平成26年5月	紫雲天井壁塗装		1,253,000	
6月	白雲正面扉修理		367,500	
7月	紫雲白雲 エアコン修理		892,500	
9月	竹林庵2階改装		934,500	
10月	境内植木剪定		167,475	
11月	竹林庵 1階給湯室改装		561,750	
	出版・発送費			
平成25年度			1,043,250	
	積立金			
合計		4,610,000	5,219,975	△609,975

曹洞宗ハワイ別院正法寺

現在、曹洞宗の寺院がハワイには、ハワイ島２ヶ寺、マウイ島１ヶ寺、モロカイ島１ヶ寺、オアフ島４ヶ寺、カウワイ島１ヶ寺、全島で９ヶ寺がある。

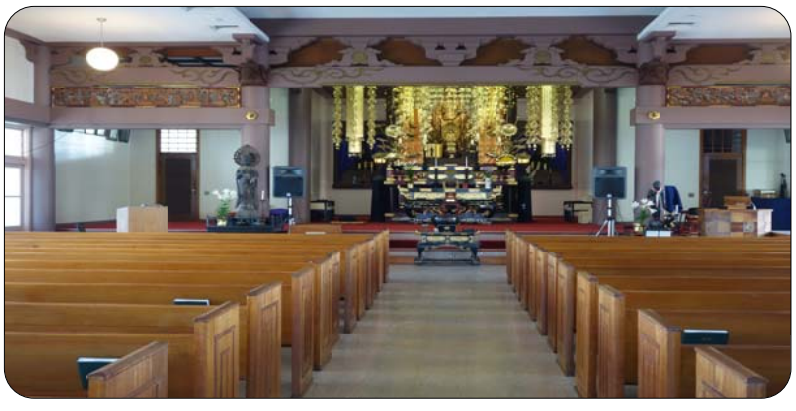
その中でも「曹洞宗ハワイ別院正法寺」は、オアフ島、ホノルルに位置し、インド様式の建造物で目を引く。今から１００年前の１９１３年当時のホール通りにあった。（今現在は高速道路になっている。）

現在の当別院の場所は、交通の便もよく、ホノルル国際空港から車で約２０分の場所に位置し、近隣には日本総領事館、他宗派の寺院が数多く存在する場所で、別名「寺院通り」とも言われてる。

又、山側からの心地よ

風、照りつける太陽、ゆったりとした時間がたおやかに流れる。

ハワイでは、こうした背景のもと日本からの移民者が築きあげてきた努力と血のにじむ苦労があってこそ今の日系社会があり日本の文化が残り、多くの人々に支えられて今日の寺院が存在しているのである。



住所 1708 Nuuanu Avenue Honolulu HI 96817 U.S.A.
電話 1-808-537-9409
fax 1-808-537-6320
E-mail sotohawaii@hawaiiantel.net

である。

各寺院においては、年中行事や冠婚葬祭だけでなく公文、講演会、バザーなど様々な催しの場を提供し、日系社会のコミュニケーションの基礎固めという役割を果たすようになっている。

現在別院では、三味線、舞踊、民謡、茶道、三線、お琴、書道、生け花、和太鼓、さまざまな日本の文化を織り交ぜながら学びを体験している。又、ウクレレ、日曜礼拝、観音講、観音地蔵巡拝、坐禅会、数多くの行事が一年を通して行われており、仏教信仰と深く関わっているのである。

ハワイにおける一大イベントである「盆踊り（ぼんおどり）」は毎年７月の終わりから９月の始めまで続く。

異国の文化に包まれながらも、しっかりと教えを守っている寺、「曹洞宗ハワイ別院正法寺」に旅行のついでに是非、参拝していただきたいものである。

桃源院・布教発展基金
ならびに護持会への御協力のお願い

平素より当院には檀信徒の皆様より多大なる御厚情を賜り、心中より御礼申し上 げます。また例年の布教発展 基金、 護持会寄金に多数の御協力 をいただき感謝いたします。皆様の浄財は施 設維持管理、桃源院施設拡充、布教関係の事業に充当いたしております。今後ともこの趣旨への御理解を頂き、御協力の程お願い申し上げます。

布教発展基金・護持会費　　合計　金五千円　也

１、境内と4棟の建物、それに付随する施設等の維持費。
２、旧竹林庵の建て替え、新本堂の用地調達の積み立て寄金。
３、「機鋒」の編集、製本、発送にかかる経費。

振替用紙を同封させていただきました。御替助のもと金5,000円の御協力を御願いいたします。御芳名は秋彼岸合同供養会にて御報告申し上げます。（強制では決してありません）

宗教法人桃源院　護持会　合掌

平成26年度 盂蘭盆会合同供養と棚経のご案内

紫陽花の咲く季節、皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。
今年も盂蘭盆合同供養会を下記日程にてご案内いたします。
また、棚経（自宅経）の日程も併せてご案内いたします。
同封.の申込用紙にご記入の上、6月30日（月）までに郵送かファックスにてお申し込み下さい。

盆供養	7月　5日（土）	10時の部	12時の部	14時の部
新盆供養	7月　6日（日）	10時の部	12時の部	
盆供養	7月 12日（土）	10時の部	12時の部	14時の部
盆供養	7月 13日（日）	10時の部	12時の部	14時の部

盂蘭盆供養料
一霊につき　一万円
新盆供養料
一霊につき
一万五千円
卒塔婆料
一本につき　二千円

盆供養・新盆供養に拘わらず、お時間の都合の付かない場合、どの時間にお申し込みされてもかまいません。

口桃源院駐車場は満車が予想されます。当日は､各法要開式30分前から豊田駅北口より送迎バスを運行いたします。どうぞご利用下さい。
□法話･御詠歌･簡単なお食事･お抹茶･お菓子もございますのでお誘い合わせの上お参りください。
□『欠席供養』
当日欠席にての供養をご希望される方は、申し込み用紙に［欠席」とご記入の上、お手数ですが現金書留にてお申し込み下さい。ご供養の上「供養記念品」をお送りいたします。

棚経巡行日

7月10日（水）	東京都区内・神奈川県・埼玉県・千葉県 多摩市・町田市・稲城市・狛江市・調布市
7月11日（木）	西東京市・武蔵野市・東久留米市・清瀬市 三鷹市
7月14日（月）	立川市・昭島市・東大和市・武蔵村山市・青梅市福生市・羽村市・あきる野市・西多摩郡・国立
7月15日（火）	八王子市・日野市

午前・午後・どちらでもよい
にいずれかを〇印で囲ってお申し込みください。

ご不明な点や、日程のご相談があれば、桃源院までお早めにご相談ください。

電話　０４２－５８３－１１３３